

櫻井義秀・川又俊則著

## 『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から』

法蔵館、2016年3月刊、菊判、425頁、3,000円

武田 道生\*

### 1. はじめに

近年、人口減少と過疎に関する実態調査や聞き取り、宗勢調査あるいはアンケート分析など多様な取り組みが、特に伝統宗教各教団の付置研究所を中心になされてきている。評者も、浄土宗総合研究所で成果報告書を刊行したところである。本書では真宗本願寺派を筆頭に、多くの教団や研究者の研究分析成果で構成されている。またこれまで、櫻井・川又両氏が取り組んできた過疎問題とソーシャル・キャピタル論の現時点での、「寺院仏教にのみ絞った集大成」となっている。評者の視点が、人口減少と過疎を中心に研究してきたため偏りが多いことと、ソーシャル・キャピタル論に疎いことを予めお断りしておきたい。

さて、本書の意図と概略は、丁寧に「はじめに」で、説明されている。

本書は、現代日本において一般の寺院や檀信門徒が、①人口減少など地域の衰退②伝統的な葬送意識の衰退③寺院の世襲による護持の困難という事態をどのように受け止め、どのように〈寺院仏教〉を維持していくかを展望することを主たる目的としている。対象は寺院仏教のみで、各執筆者はその趨勢を社会調査の資料に基づいて正確に平明に記述し、当面する事態を当事者である住職と檀信門徒が家族や地域社会の課題として、どのように捉え何をしようとしているのかを可能な限り「記述」することが、共通している。(p.6) 社会学者である編者たちが、多くは僧侶であり研究者でもある各執筆者に求めたのはこうしたスタンスである。この点は、本書を手に取るに当たって、まず確認して

おく必要がある。今後の寺院のあり方や積極的な課題の解決策は提案していない。この問題はそう簡単に解決可能ではないことは明かである。具体的に本書がどのように構成されているか見てみよう。

### 2. 本書の構成と概要

#### 第Ⅰ部 人口減少社会と宗教

第1章 人口減少社会における心のあり方と宗教の役割（櫻井義秀）

第2章 過疎と宗教—30年をふりかえる（冬月 律）

#### 第Ⅱ部 宗派の現状と課題

第3章 過疎と寺院—真宗大谷派（櫻井義秀）

第4章 信頼は醸成されるか—浄土真宗本願寺派（那須公昭）

第5章 住職の兼職と世代間継承—真宗高田派（藤喜一樹）

第6章 宗勢調査に見る現状と課題—日蓮宗（灘上智生・岩田親靜・池浦英晃・原一彰）

第7章 過疎地域における供養と菩提寺—曹洞宗（相澤秀生）

第8章 寺院の日常活動と寺檀関係—浄土宗（大谷栄一）

#### 第Ⅲ部 寺と地域社会

第9章 門徒が維持してきた宗教講—真宗高田派七里講（川又俊則）

第10章 抵抗と断念—地方寺院はなぜ存続をめざすのか（ダニエル・フリードマン）

第11章 廃寺—寺院・門信徒の決断（坂原英見）

第12章 仏婦がつくる地域—ビハーラの可能性（猪瀬優理）

\* 淑徳大学

### 第13章 坊守がつなぐ地域（横井桃子）

### 第14章 傾聴する仏教—俗世に福田を見る（櫻井義秀）

この構成は、仏教寺院の組織構造から、非常によく考えられて組み立てられている。

第Ⅰ部は、第1章の櫻井論文と第2章の過去30年間に過疎問題を扱った宗教専門紙の記事から、仏教各宗派と神社界の対応策の相違について比較検討し、その差違を分析する冬月論文からなっている。各宗教界とともに、様々な分析をするものの危機感はありながら、有効な対応策は見つかっていない。この2論文が全体の総論的な役割を担い、読者への道案内役を果たす。特に第1章で櫻井は、日本の社会全体が人口減少に転じ、様々な変化をしてきた有り様を社会学的に論じ、その影響によって日本人の心のあり方や宗教心がどのように変容しているかを明らかにする。人口減少社会が到来した現代において、江戸期に政治的に成立した寺檀制度が、過疎化に苦しみながらも、地域社会に互恵的な社会関係や人間関係を取り戻す、あるいは新たに生み出すネットワーク作りというソーシャル・キャピタルとしての効果を発揮する可能性を3点あげている（p36）。

①寺院は地域社会の檀信徒やそれ以外の住民とどのような関係を結び、日常の法務や行事を通して、その関係の維持強化を図っているのか。

②寺院の住職や家族が、宗派によって寺庭・坊守など呼称や役割は微妙に異なるが、地域社会で、民生委員や教育委員、社会福祉協議会委員など「公職」やボランティア的な社会活動に参加し地域社会の活性化に寄与しているか。

③仏教寺院の存在が地域の人々にどのような物理的宗教的な意義を提供しているのか。

こうした問い合わせに答える形で、以降の各事例報告がなされている。読者は、これらの問い合わせのどれに答える形で書かれた論文かを考えることが求めらる。

第Ⅱ部は、仏教寺院の特徴である各宗派の教

区やその下の組織である組などを対象に、記載順に真宗大谷派・浄土真宗本願寺派・真宗高田派・日蓮宗・曹洞宗・浄土宗が、各宗勢調査や事例調査の分析によって、おもに当該宗派の研究員によってなされている。これだけ多くの宗派の分析の集成が、当該宗派の研究員によってなされたことも画期的なこととして、開かれた研究の場を提供したことも本書を大きく評価する点である。以下各章ごとに、評者の簡単なコメントを記したい。

第3章で櫻井は、巨大・広大な北海道教区の札幌一極集中教区の深刻な諸問題を明らかにする。都市寺院と地方寺院の格差が広がるなか、それらの活動を比較しつつ櫻井は、住職が一軒一軒訪れて、短時間ながら月忌参り（がつきまいり）を地道に行い、安否確認をしたり何気ない会話をすることにソーシャル・キャピタルの原点を見る。地元に残った高齢者との繋がりこそ、声高ではなくあえて社会支援社会貢献と意識されていない活動であるとする意見は評価したい。櫻井が本章の最後に提案する改革案3点については、宗内研究者の多くが持つものだが、宗派として実現が難しい。

第4章で那須は、本願寺派の滋賀県の山間部の門徒主導で所属寺院の護持会費を管理する例をあげ、その寺院の「見える化」が信頼関係を醸成していると報告する。確かに、われわれの調査でも、散発的には同様のケースは見られたが、地区全体の例はなかった。住職の兼業と地域活動との必然性と「見える化」との関連性が少し強引な関連づけに感じた。

第5章の藤喜論文は、真宗高田派特有の、喪家と親戚の他に同行と呼ばれる組の人達も法要に参加する「同行参り」の世代間継承を記述する。評者には、この「同行参り」こそ、ソーシャル・キャピタルを考察する絶好の対象だと思われるが、残念ながらあまり力点を置いて記述されていない。論題と内容にかなりのずれを感じた。

以後3章は、日蓮宗（平成24年）、曹洞宗（平

成17年) 浄土宗(平成19年)の宗勢調査に関して論述されている。こうした大調査の課題は、作問、調査実施、さらに分析、活字化にかなりの時間がかかることがある。特に現在変化の激しい過疎問題などを扱うときには。また各宗派の調査時期がずれているために、比較対照が難しい。現在では、各宗派の教団付置研究所間の、過疎問題に関する研究交流会が始まり、作問の共通化などが、話し合われ始めている。各教団間の共通点と相違点を明らかにし、過疎問題の共有が進められ始めたことは画期的なことで喜ばしい。

第6章は、日蓮宗の宗勢調査から見える現状と課題で、課題の第一は、檀信徒数の減少で、その理由は、絶家と転居という過疎にともなって起こる問題である。難点をあげれば教区単位での分析に止まっていて、過疎指定地域だけの情報がない。本書のソーシャル・キャピタルとの関わりで注目される点は、寺院規模とコミュニティ活動との関連性で、檀家が増加し規模の大きい寺院ほど積極的に活動に参加するという深刻な二極化である。

第7章では、曹洞宗の総合宗勢調査(平成17年)と曹洞宗檀信徒意識調査(平成24年)をもとにした相澤の分析で興味深いのは、過疎地域の檀信徒が求める宗教行為はほぼ葬儀・法事・行事・墓参といった「供養」に集中し、菩提寺と住職を比較した時、菩提寺の存在そのものを重視しているという。これを相澤は「死者や先祖を祀る菩提寺が代わりが効かない「我が寺」であるのに対して、番人である住職は当人である必然性がないといった意識があるのかもしれない」と考察する。これは菩提寺と世襲化した住職への思いは一体という意識は過疎地でこそ当然と考えてきた評者にはかなり衝撃的であった。過疎地における菩提寺の存在は、地域とそこに暮らす人々を結ぶ要として想像以上に大きいことが窺える。世襲化が遅かった曹洞宗の独自性はあるか気になるところである。

第8章で、大谷は、櫻井が第1章であげた、

前出①を課題として、日常の法要・年中行事、教化活動を通して、寺院と檀家との紐帯の強化がなされているかを浄土宗滋賀教区の各種講の存在と機能から考察する。滋賀教区は、浄土宗全体を見ても、信仰の篤い地域として知られ、寺院数は470ヶ寺と多く、一寺院当たりの檀家数は極めて少ない。滋賀県は過疎地域が極めて少ないが、現在有効に機能している多種の活動も将来的には、檀信徒・寺院住職の高齢化など、それぞれ家庭内・寺院内で継承が円滑になされなくなる危惧を感じている。大谷は、方法論の問題であろうが、アンケート調査のデータの分析からだけでの寺院と檀信徒関係のソーシャル・キャピタルのあり方を積極的肯定的に捉えることに非常に慎重であることが窺えた。

第Ⅲ部「寺と地域社会」では、個別寺院と地域社会の関連を通して、ソーシャル・キャピタルの多様なあり方を報告している。

第9章で川又は、真宗高田派の中興第十世真慧上人を崇敬する講で、地域十二ヶ寺の門徒が二百年以上も毎月の行事を行ってきた七里講を調査している。現在過渡期にさしかかっている七里講は、産業構造の変化から、担い手が退職後の高齢者中心であり、地域外に居住する次世代の参加が難しく、活動内容もやむなく変えざるを得なくなっている。信仰の要である本山護持という建前だけでは、今後のますますの衰退と行事内容の改変を余儀なくされることが予測される。つまり地域全体で共有される力を失いつつある。

第10章と第11章は、過疎地で存続の危機に瀕する寺院の事例報告である。フリードリックの第10章は、過疎のため存続が危うい寺院の例から、しかしながら、寺院の存続のために学究生活を捨て寺の維持に、新たな試みを行い、苦闘する副住職の抵抗と今後いつかやってくる廃寺(寺の死)を看取る覚悟を記述する。この副住職の苦悩(p301-302)は、同業である評者には察してあまりあるところで、胸が張り裂けそうになった。檀信門徒の仏飯と継承の願い(私

のお葬式をしてほしい）によって育てられてきた者だからこそ抱く選択の余地のない決心だからである。彼のこの選択こそが多くの門徒の願いで、ソーシャル・キャピタルそのものなのだと思いつつも、心は重い。

第11章で坂原は、自分の関わった廃寺もしくは兼務寺院化の事例を通して、寺院とはどういう存在かを問うている。評者も、自宗内の廃寺・合併などを検討する委員会に所属していた経緯があり、廃寺や合併の困難さと事情の複雑さや法的問題など多くの障害があることを実感している。本論では触れられていないが、伽藍堂宇の解体費用の膨大さは廃寺寺院には負担が重過ぎる。廃寺の法的申請費用も大きい。その後の境内地の所有権も、山間地が多く管理が困難で、ほぼ間違なく希望者がいない。文化庁は廃寺を進めるが国有地化はしない。なかでも無住職寺院の場合、宗派の費用負担は莫大で手をつかねているのが実情である。近隣の同宗寺院ばかりか他宗寺院による助け合いがなければ、抜本的な解決策がない。檀信門徒にとっては、自分たち一族や地域住民の長い歴史の流れと共にあるアイデンティティが今失われようとしている。

第12章は、これまで本願寺派を中心に蓄積されてきビハーラ活動などと異なる視点から、仏教婦人会（仏婦）のビハーラ活動の意義を捉える。地域の「仏婦」のボランティア活動自体は、さほど重要な役割をになっていないと批判する向きもあるが、猪瀬は、参加している「仏婦」が行う活動に共感する人達との「縁」「つながり」が形成され、さらに地域における助け合いの関係が構築され広がりを見せていているという点にソーシャル・キャピタルとしての活動の意義を見いだしている見方を評価したい。

第13章で、横井は坊守の存在の重要性は評価しつつも、そのなかで坊守が地域社会の危ういバランスの上で活動していることを明らかにする。横井は農村地帯と都市開教寺院での地域比較を試みている。そこで特に窺えるのは農村地

帯での活動しにくさである。評者はこうした観点での比較分析も評価するが、農村部では別の観点も考えられるのではないか。それは、坊守たちの出身である。近年、私の所属する浄土宗では、在家出身の寺庭婦人（坊守）が増えている。寺に生まれた女性は「寺は大変だから、住職になる人とは結婚したくない」というのである。在家から結婚した坊守と寺に生まれ住職後継者を迎えた坊守との相違という観点で、考えることは難しいだろうか。寺に育ち養子を迎えた評者母の日常活動は、その地域で生まれ育った者が当然のこととして社会貢献活動を行っていた姿だった。そこには、「互酬性」といった言葉の持つ胡散臭さはかけらもなかった。櫻井のいう寺院仏教のソーシャル・キャピタルはそうした歴史的土壌の上にも生まれるともいえるのではないだろうか。

第14章で櫻井は、現代日本の様々な領域で苦悩する人々への布施行を行う福田思想（善き行為の種をまき功徳の収穫を得る仏教社会福祉の理念『岩波仏教辞典』）を、特に現代人が求める承認欲求に応えようとする様々な傾聴の実践事例から概略を紹介したのち、全国一高齢化率が高く高齢者の自殺率が高い秋田県の藤里町で、自殺予防の傾聴活動と引きこもり支援活動を行なう一人の住職と檀家・地域住民、社会福祉協議会の連帯に、地域の活性化させる地域寺院のソーシャル・キャピタルの可能性を評価する。個人の強く熱烈な生き方が磁力となって地域を巻き込んでいくことに。

以上、見てきたが、寺院仏教のソーシャル・キャピタルは、多様なレベルの存在意義を持っていることに改めて気づかせられる極めて重要な論集であるとして再度評価したい。

#### 付記・謝辞

今回、学会編集部から書評の依頼を受けたが、櫻井・川又二氏の「寺院仏教の日常活動ないしは存在そのものこそソーシャル・キャピタルである」という観点から寺院仏教を再評価す

る本書に出会い、あまつさ、書評ともいえない駄文を書かせていただく機会を得たことには、感謝してもし切れない。近年マイナス評価ばかりの寺院仏教に身を置く者として、特に第10章の「抵抗と断念」に報告された副住職の決心は、涙なしには読むことができなかった。この副住職の存在こそ地域寺院が生み出してきた生き方でありソーシャル・キャピタルそのものではないだろうか。

## 参考文献

浄土宗総合研究所 2016『過疎地域における寺院に関する研究』。

## 書評へのリプライ

櫻井義秀\*・川又俊則\*\*

過疎と寺院の護持の問題を宗門の立場と研究者の立場で調査研究されてきた武田道生先生に書評をいただいたこと、厚く御礼申し上げます。

### 1. 寺院仏教が生み出すソーシャル・キャピタルは維持されるか？

武田氏は本書のなかで寺院仏教の当事者（住職・寺庭婦人・後継者）と檀家（総代や婦人会）によって維持されてきたソーシャル・キャピタルとして次の点を確認された。

- ①月忌参りなどの法務を通じた人間関係の維持。
- ②「同行」参りなど地域行事の継承。
- ③婦人会が果たすボランティア活動。
- ④寺族として檀家の願いを受け止めることを人生とする寺庭婦人や青年僧侶の覚悟。
- ⑤地域の共同性を再活性化させることにかける僧侶のイニシアチブと呼応する地域社会。

しかし、①は地域の高齢化に対応した見守り行為である一方、人口減少＝檀家数減少のために月忌参りや葬儀・法事の法務に専念できない兼業・兼職の住職がさらに増えていく現実がある。④のように地域の檀家とソフト・ランディングがはからうとする僧侶は稀であり、世襲で

維持されてきた地方寺院は、無住の寺院になるだろう。寺族であれ在家出身であれ、家族持ちであれば食べられない寺を継ぐ僧はいない。寺院が維持してきたソーシャル・キャピタルも寺院がなくなれば維持できないし、檀家より先に住職や寺族の方が先にいなくなるのである。

北海道の各宗派は北海道開拓の歴史と共に教線を伸ばし、離島や僻地にも寺院が建立された。しかし、北海道の人口は今後20年ごとに100万人ずつ減少することが予測され、その減少分は札幌を除く地方の大部分である。ドラマ「北の国から」で1980年代に描かれた富良野麓郷の開拓農家の廃屋のように、伽藍堂宇や庫裏が朽ち果てるままに放置される可能性は大きい。

本書では廃寺の問題が扱われており、さまざまな理由により寺院の後継者探しが頓挫し、廃寺となった事例が示されている。建物の放置・荒廃は檀家や地域の人々の心の荒廃にもつながるという。ただし、武田氏が書いておられるように、合併や廃寺の手続き、堂宇や境内の敷地管理は、住職がそれなりに準備してやらなければできないことであり、現在、後継者が見つからず、特段の対応もしていない地方寺院が多い。

では、どうしたらよいのか。本書の執筆者は事例分析を通じて寺院の今後のあり方に関して示唆をしているのであるが、編者の櫻井は次の課題を挙げた。

- ①都市寺院と地方寺院の連携。血縁と法縁のバランスを取りながらの人材交流は不可能か。
- ②一寺院一宗教法人に加えて、別院が地域寺院の包括的運営を行い、住職の職員化を図る。
- ③地域見守り型を生かした社会支援を再び構想する。明治期から社会事業に取り組んだ地域の仏教会は地方にもあった。

おそらく、③については研究者含めて宗門、各寺院も余力があれば異存がないと思われるが、①と②については宗派ごとの事情もある。宗派の財政規模や宗務行政の包括化が進んでい

\* 北海道大学大学院文学研究科 教授

\*\* 鈴鹿大学こども教育学部 教授

る大谷派や本願寺派でも難しいのであれば、他は推して知るべしである。武田氏も指摘されたように、対応策は簡単に出てくるものではない。

もちろん、残る力量がある寺と残す努力をしている僧侶のみ残ればいいのではないかと割り切った方がいいかもしれない。そのように考えるのは研究者のみならず、寺院関係者にすらいるだろう。神社並に兼務寺院を増やしていくけば、住職の数が減っても寺院がすぐに減るわけでもない。しかし、寺院数は漸減で維持されたとしても、住職がいない寺院にも檀家数に応じた寺院への賦課金を高齢化した檀徒に依頼できるだろうか。地方の寺院を調査で回ってみて、賦課金を自身の兼職の稼ぎや年金で出す住職が少なくないことを確認している。住職は「自分の寺」という責任感で宗派へ各種納付金を納めるのではないだろうか。

いずれにせよ、僧侶が減って無住寺院が増えれば、宗派財政は今以上に逼迫し、安泰に見える檀家数の多い寺院も過重負担に耐えきれなくなる。そうなれば、宗派仏教は文字通りの個別の寺院仏教になる。裾野を欠いた大本山や総本山、教学機関、佛教系学校、あるいは仏教学や宗学の将来はどうなるのだろうか。

実のところ、すでに現在、寺と関係を持たずとも、葬儀や法事は葬祭業者に、公営や民間業者の墓苑や納骨堂に家族の骨を納めることができる。ただし、集落墓地が使えず、公営墓地がない地方の中途半端な街場の住民は、寺の墓地を利用するしかない。武田氏がは曹洞宗の檀家意識に驚いた旨書かれていたが、まさに地域住民が必要としているのは「墓や位牌堂を管理する寺」なのだ。

仏の教えや僧侶に期待していないのかとがつかりされるかもしれないが、葬儀や法事で家族・親族の紐帯を確認し、寺院の行事で地域の共同性を維持してきた歴史こそ寺院仏教そのものだったのではないだろうか。そして、それを丁寧に実践し続けてきた寺院では、檀家側に

も、「自分たちの寺」という思いが引き継がれ、菩提寺へ財施などの貢献をしていただろう。その意識が弱くなれば、途端に維持は厳しくなる。

菩提寺がなくなるというのは、地方の人間にとて居場所や関係性を喪失することに等しく、地域社会にとって危機的事態なのである。一極集中の時代を迎え、北海道以外でも人口減少時代を現実に迎えている。「墓じまい」「直葬」など、寺院仏教を揺らがせかねない現況の根底には、檀信徒との関係の「薄さ」をつかみ切れていない仏教側全体の課題があったのではないか。

## 2. 人口減少時代の宗教のあり方

日本の寺院仏教は本末関係や師弟関係による法脈・法縁を通じて教線を拡大し、明治以降に世襲化によって地域社会における寺院運営の安定化を図ってきた。第二次世界大戦後の日本全体での経済成長は、布施額などにも好影響を与える「葬式仏教」という揶揄すら鷹揚に受け止められていた。だが、地方の人口減少と寺に依らない葬祭や墓苑の浸透により、寺院仏教は徐々に安定的経営基盤を失いつつある。

人口減少社会や世俗化のインパクトは神社や、個別教会が宗教法人や宗教団体となっているキリスト教と新宗教でも同様である。この時代をどう乗り切るかという宗教側のサバイバル的戦略についての議論は活発だが、同時に人々の精神的希求がどこにあるのかを現実に即して認識し、対応していくことが宗教者のみならず、宗教研究者にも求められるのではないかと思う。

本書の調査研究の意義として、武田氏から、①浄土真宗（大谷派・本願寺派・高田派）、日蓮宗、曹洞宗の宗勢調査と個別事例調査を組み合わせた共同研究のプラットフォームとなること、②「葬式仏教」や「寺院消滅」と一括りで捉えきれない宗派、地域、寺院、僧侶の当事者性や差異性を指摘した参照可能な調査研究に

なったことを、評価いただいた。今後は、仏教系大学の研究者や、宗派の研究機関とも協力しながら、マクロ的な人口減少社会の認識と、メゾーレベルの地域ごとの差異に即した調査研究を継続していこうと考える。

本書は、人口減少時代における宗教のあり方を寺院仏教から考察したものであるが、他宗教からも調査研究が出てくることを期待したい。共同の研究会などを設けることで、宗教者・研究者それぞれの立場で認識を深めることができるのでないかと思われる。

最後になるが、武田道生先生には各章の論点や問題点など含め、丁寧にご紹介いただいたことに改めて御礼申し上げたい。